

---

# もしヘンゼルとグレーテルがネズミと紫苑だったら

小南冬知亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もしヘンゼルとグレーテルがネズミと紫苑だったら

### 【Nコード】

N1287Z

### 【作者名】

小南冬知亜

### 【あらすじ】

NO.6の童話パロです

内容は・・・題名の通り。

ヘンゼルとグレーテル、ver.ネズミ&紫苑です( ^ | ^ )

原作知らなくても読めるとは思いますが、つまらないです  
読んでても、なんだこれ？って思うかもです

つたないとは思いますが……………読んで頂けると幸いです

では、扉を開けましょう  
ようこそ、ヴァイジョン幻想へ

## プロローグ(ようこそ、幻想)ヴィジョン(へ) (前書き)

このお話を開いて頂きありがとうございます。

さて、このお話はNO.6のキャラがもし童話世界の住人だったら、  
というもので、原作とは異なった世界であることをご了承さ  
い。

ですから、聖都市も存在しませんし、西ブロックもありません。  
ご注意ください。

では、本編へ……

## プロローグ／ようこそ、幻想（ヴィジョン）へ

あら？眠れないのですか？

だったらいいお話があります。

ヘンゼルとグレーテルって読んだことありますか？

そうです。グリム童話のです。

では、NO.6は？

はい。あさのあつこ先生がつくられたあのお話です。

あ、ありますか。

ならばよかった。

ではお話ししましょう。

『もしヘンゼルとグレーテルがネズミと紫苑だったら』を。

えっ、どんなお話かって？

そうですね、私が聞いた、もう一つのヘンゼルとグレーテル、ネズミと紫苑のお話……ですかね

はい？あ、題名のまんまですよ。

だって、今話したらつまらなくなってしまつてしまうでしょう？

ではじめましょうか。

プログラマーよろしく、幻想（ヴィジョン）へ（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

投稿に少し時間がかかるかと思えます。  
でも、見放さずについてやって下さい。

## 第一話〜神だつてとんでもない失敗をしでかす〜（前書き）

序章と言つには短いです。

お話の設定しか語っていません。

タイトルの「神だつてとんでもない失敗をしでかす」はあさの先生の「神々の午睡」のグドミアノのセリフから頂きました。

ちなみに前回のプロローグ〜ようこそ、<sup>ヴァイジョン</sup>幻想へ〜は（ご存知の通り）ネズミのセリフから頂戴しました。

短いですが、どうぞ………



## 第一話　神だつてとんでもない失敗をしでかす

あるパン屋が大きな大きな森の近くにありました。

そのパン屋は女性の人が一人できりもりしていました。

「ありがとうございます」

今日も女性――火藍は元気に応対をしていました。

でも、お客さんは多くても一日五人。

誰も来ない日もありました。

それでも彼女が元気な理由。

それは、二人の我が子の存在でした。

一人はネズミ。

とても頭がきれ、ナイフの扱いに長けている一方で、心優しい少年です。また、歌がとても上手で、それは森のたくさんの動物も、木も、花も、みんなが聴き惚れるほどでした。

もう一人は紫苑。

天然だけれど、記憶力に優れており、芯が強い少年です。困っている人を見過ごすことができない優しさを持っていて、近くの子供たちは彼のことを好いていました。

二人はとても仲がよく、いつも一緒にいました。

おつかいに行く時も、森へ遊びに行く時も、母親の火藍の手伝いをする時も。

彼らの父親は彼らが生まれてすぐに死んでしまいました。

今は叔父が父親がわりをしていて、名を力河といいました。

彼は小さな新聞社で新聞を作っていました。

さて、このパン屋のそばでは不思議な病気が流行っておりまして、それはある時突然現れました。

その病気にかかった者はとても乱暴になり、悪い方へ、悪い方へと物事を考えてしまい、仕事に手がつかなくなるほどでした。

実はこの病気、天の神様が関係しておりました。

神様が人々に悪いからといって捕まえていた、ミン虫という名の小さな虫が逃げ出してしまったのです。

逃げ出したミン虫は、人々の耳の中に入り、その人の負の感情、マイナスの感情を増幅させました。

それがこの病気なのです。

天の神様は大慌てでミン虫を捕まえました、ミン虫がたくさんいたために間に合っていないのです。

第一話〜神だつてとんでもない失敗をしでかす〜（後書き）

ありがとうございます。

まだまだお話は始まつたばかり。

だって、森に行つてもいなければ、お菓子の家にも行つてないですよ？

さて、童話らしさがだせたでしょうか？

これからが本番です。

遅くなりそうですが、よろしく願います。

## 第二話〜ミン虫は冬でも活動する〜（前書き）

またまた、短いです。  
すみません。

第二話〜ミン虫は冬でも活動する〜はNO.6に出てくる寄生バチが「冬には活動をやめるだろう」と言っていた紫苑の言葉をもじったものです。ミン虫に季節は関係ありません。

・・・まあ、これ以上かくと余計なことまで書きそうなのでこれくらいで。

では、本編へ……………

## 第二話〜ミン虫は冬でも活動する〜

病気が流行り、とうとうパン屋にくる人はいなくなってしまう。  
した。

パンが売れなければ新しいパンは作れません。  
それでも火藍は店を閉めようとはしませんでした。

しかしお客さんはきません。

そこで火藍は、もうすぐ冬になろうとしているなか、あちこちの  
家をまわってパンを売りはじめました。

大変なのは力河も同じでした。

パンを買う余裕がない人が新聞を買えるわけがありません。  
とうとう新聞社はなくなってしまい、力河は途方にくれました。  
家には僅かなパンが残っているだけになってしまったからです。  
これでは四人で飢え死にするほかありません。

そんな力河のそばにミン虫がいました。

「こいつは住みやすそうだ」

ミン虫は力河の耳にヒュンと入りました。  
それに気がつかなかった力河はそのまま家へと帰りました。

第二話〜ミン虫は冬でも活動する〜（後書き）

ありがとうございます。

本当に状況の変化がほとんどありません。  
ごめんなさい。

次回は森に入る・・・と思います。  
ネズミと紫苑の動きですが。

そうそう。今までできてませんが、イヌカシものちのち出てくる  
と思います。

では、また次回・・・お会いできるとうれしいです。

第三話〜同情や情けで、人は救えない〜（前書き）

また短いです。

・・・いつも言っていますね。

第三話〜同情や情けで、人は救えない〜はNO・6に出てくるネズミのセリフ「歌や物語で、人は救えない」からいただきました。力河の心境を表したものです。

さて、お話を始めましょうか・・・

### 第三話〜同情や情けで、人は救えない〜

家では火藍が寝込んでしまっていました。  
寒いなかパンを売りに歩いたせいで風邪をひいてしまったのです。

その日の夜のことです。

紫苑は火藍の看病に疲れてぐっすり寝てしまいました。

ネズミも寝ようとしたましたが、空腹で眠れませんでした。

力河もまた、寝ていませんでした。

これからのことを考えていたのです。

「はあ、どうしたらいいんだ………」

力河の声でしたので、ネズミはそつと寝室とリビングの間のドアに耳をつけました。

「もうパンだつて一人一個しか残っていないし……このままでは火藍も子供達もみんなで飢え死にしまう………」

ネズミはしつかり聞いていました。

しかしその後、急に力河の声が小さくなってしまったので、聞こえなくなっていました。

なぜなら、力河が火藍の方へ行ってしまったからです。

「……なあ、火藍。おれ、どうしたらいいんだろうな？」



その時、風が吹いて森の木々を揺らしました。

「！そうか！・・・でも、いや、しかし・・・仕方ない、  
か」

### 第三話〜同情や情けで、人は救えない〜（後書き）

ありがとうございます。

全く、いつになったら森へいくのか！！と思われているかたも多いでしょうから、言っておきます。

次回は絶対入ります！

力河の決断はその為のものです。

さて、ヘンゼルとグレーテルの二人は、白い石を使いましたが、ネズミと紫苑はどうするのでしょうか？

その謎（？）も解決していこうと思っています。  
どうなるのか考えてみてください。

では。

また次回、陛下にお目通りできることを望んでおります。

第四話 天使は森に子ども達を押し付けたりしねえよ (前書き)

第四話 天使は森に子ども達を押し付けたりしねえよ はイヌカシ  
のセリフ「天使は他人に子ども達を押し付けたりしねえよ」からい  
ただきました。

.....そうとう無茶な題名ですorz

では、本編へ。

第四話　天使は森に子ども達を押し付けたりしねえよ

「森に行くぞ」

次の日、力河はいいました。

「森へ？どうして？力河さん」

「薬草と薪を探しに行くんだ」

「そうか！母さんのためだね！」

三人は森の奥へ奥へと入って行きました。

「おい、ネズミ。なんでそんなに歩くのが遅いんだ！」

「仕方がないだろ、足痛めてるんだから。それにおっさん歩くの早過ぎ」

「えっ？そうか？」

「はい。紫苑だつてきつそうじゃないか」

「そ、そんなことないよ。ぼくは大丈夫ですから、早く集めて母さんのところに持っていかないと」

「・・・そうだな。早くしないと火藍がまってるからな・・・」

「・・・そんなこと考えてなかったくせに（ボソッ）」

「ん？どうかしたの？ネズミ」

「いや、なんでもないよ」

「ほら！紫苑もネズミも行くぞ」

「はい。いこう、ネズミ」

三人は大きな木のところまでやってきました。

「おれは向こうで探すから、紫苑たちはこの辺探してくれ。暗くなる前には戻ってくるから、あまり遠くにいくなよ。それからこれがお弁当。」

力河は紫苑とネズミに一つずつ、パンを与えました。

「分かりました。ほら、ネズミ。探そうよ!」

「(ちっ!これだけかよ)・・・あ、ああ。分かったから、手離せ  
つて!」

第四話〜天使は森に子ども達を押し付けたりしねえよ〜（後書き）

ありがとうございます。

やっと森にきました！

よかった・・・

次回は少し遅くなりそうですorz

でも、見放さないで下さい。

お願いします。

では、また次回会えることを望んで  
再開を必ず

第五話「死にたくないなら、ついてこい。何があっても二人は一緒だ」(前書き)

第五話「死にたくないなら、ついてこい。何があっても二人は一緒だ」はネズミのセリフ「死にたくないなら、ついてこい。何があっても離れるな」からいただきました。

治安局員に連行される紫苑を救いだした時のセリフです。

……無茶ぶりなのはわかっております。すみません。

では、とりあえず、本編へ。

第五話　死にたくないなら、ついてこい。何があっても二人は一緒だ

やがて日が暮れてきました。

紫苑とネズミは大きな木の下でパンを食べていました。

一人一つのパンといえども、貧しかった二人にはそれなりのご馳走でした。

ですから、一つのパンを二人でわけて食べていました。

「遅いね・・・力河さん、どうしたんだろう・・・」

「・・・・・・やっぱり」

「何がやっぱりなんだ、ネズミ」

「・・・・・・おっさんは元々おれ達を森に置いていくつもりだったんだよ」

「え？なんで・・・」

「昨夜、聞いたんだ。おっさんが悩んでるのをな。どうする？家へ帰るか？それとも、別のどこかへ行く？」

「そんなの家に帰るに決まってるじゃないか。・・・・・・あ、でも、どうやって・・・」

「帰れなくはない」

「なんで？どうやってここまで来たか覚えているのか！？」

すると、ネズミがポケットからナイフを取り出しました。



いつも持ち歩いているナイフです。

「ナイフ？」

「気がつかなかった？おれがここまでわざとゆっくり歩いてきたわけ。それはこれで木の根元に印をつけてたから」

木の根元に印をつけるには普通のスピードで歩いていてはつけられません。

ですから、ゆっくり歩く必要があったのです。

「………てことは、その印を探して歩けば、家にいけるってことか！さすがネズミだね！」

「………でも、家にはなにもない」

「あ……そうか……このパンが最後なんだっけ。つまり」

「このままあてもなく歩くしかないな」

「でも、母さんが」

「いくらおっさんでもあんたの母さんは守るさ」

「ネズミ、きみは自分の母親を、病気の母親をおいておいて平気なのか」

「おれたちが帰ってなにができる？なににもできないだろう」

「それはそうかもしれないけど」

「だったら行くぞ」

二人は歩き出しました。

ただあてもなく。

第五話　死にたくないなら、ついてこい。何があっても二人は一緒だよ（後書き）

ありがとうございます。

さて、全く進展していかないこのお話ですが………あたたかく見守って下さると光栄です。

では、次回もあなた様と出会えることを望んでおりますよ、陛下。

第六話〜二人は無事。おかしの家にたどり着けられたし〜（前書き）

第六話〜二人は無事。おかしの家にたどり着けられたし〜はネズミのメモ「紫苑は無事。西ブロックに脱出されたし」からいただきました。（もしかしたら間違っているかもしれませんが）  
小ネズミが火藍の元へ届けたメモです。

……相変わらずの無茶ぶりですが…

ではでは本編へ。

第六話　二人は無事。おかしの家にたどり着けられたし、

歩いているうちに辺りは真っ暗になってしまいました。  
しかしなにもありません。

仕方がないので、二人でよりそって眠りました。

お互いでお互いを暖めながら。

翌朝、また二人は歩き出しました。

すると、急に森が開けました。

そこには……………

「家？」

「だろうな。少なくともおれにはそう見えるけど」

「そういうことじゃなくてさ」

「どうしてこんな所にあるか、だろう」

「……………わかってるんじゃないか」

「……………なあ、紫苑。ちよっと」

ネズミはその突然現れた家に近づいて紫苑を呼びました。

「なに？」

「これ……………」

ネズミが指差す先にあつたのは、綺麗な丸の窓……………ではなく、

「さ、砂糖？」

そう。

その窓は砂糖できていたのです。

窓だけではありません。

屋根はビスケット、扉はチョコレート……………全てがお菓子  
でできた『おかしの家』だったのです。

「すごいよネズミ！全部、全部おかしだ！」

「全く。おかしの家なんて童話のなかにしかでてこないだろう、普通」

「……………お腹減ってるけど、さすがに勝手に食べちゃまずいよな」

「いいんじゃないか？ばれなきゃ。本当に魔女が出てくるなんてことないだろ。お、ここ美味しそうだな。いただき」

「まずいって！いくら食べられるからって！」

「いいんだよ。ほら、あんたも」

「ネズミ！」

二人がそんなことをしていると、中から声がしました。

『もりもり がりがり かじるぞ かじるぞ。 わたしのこやを かじるな だれだぞ。』

不思議な声でした。

女の人の声にも男の人の声にも聞こえました。

「ふーん。なかなかユーモアがあるじゃないか」  
「ユーモア？ そんなこといつてる場合じゃないよ。怒ってるんだよ。謝りにいこう、ネズミ」  
「行かなくていいんだよ。ここはこつするのさ」

そう言ってネズミは歌います。

「かぜ かぜ そつらの子。」

森の動物達も聴き惚れる声で答えたと思ったら、また食べ始めました。

「ネズミ！」

「いいんだって。もしあの声のやつが『ヘンゼルとグレーテル』を  
本当に知っているとしたら、そろそろ出てくるから待ってよ」

すると、本当に家の扉があいて……………



第六話〜二人は無事。おかしの家にたどり着けられたし〜（後書き）

ありがとうございます。

さて、少しは進んだのでしょうか？

……おかしの家は見つけれられたので進んだって事にしてください……

さて、次回は魔女さん登場です。

いったい誰なのでしょう？

（…もうおわかりの方もいらっしやるでしょうが……）

次回は来年の投稿になるかな、と思っております。

ただ、もしも予想以上の筆の進みだと今年になります。

そのときにまた貴方とお会いできれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1287z/>

---

もしヘンゼルとグレーテルがネズミと紫苑だったら

2011年12月24日06時51分発行